

古川知明

(埋蔵文化財センター専門学芸員)

慶長期富山城の姿を残す「越中国富山古城絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)の富山城本丸の東側出丸には「薪丸」と記されている。その場所は後の絵図に「東ノ丸」「東ノ出丸」「中之御屋敷」と記され、その前身になった郭と考えられており、郭として整備されたのは享保はじめ頃までと推定されている⁽¹⁾。

初代藩主前田利次は、寛文初年から富山城とその城下の整備に着手した。東の丸の整備はその際計画に入っていたと思われるが、当初は土塁で囲まれていただけであったことが「万治年間富山旧市街図」(富山県立図書館蔵)からわかる。

ところが寛文以前の前田利長の築いた慶長期富山城内郭の縄張りは、大火で焼失以後神通川の浸食を受けて北側が崩壊したため、寛文期の改修の際にはやや南にさがり方向を変えて内郭を作り直したことがわかってきた⁽²⁾。

このことにより、慶長期に「薪丸」のあった場所は、寛文期には東ノ丸とその東側に及ぶことになり、東ノ丸と全く同じ場所というわけではないことが明らかになった。

薪丸は「越中国富山古城絵図」では同様な出丸である西の丸より小さく描かれているが、絵図に記載された大きさは、南北 80 間(144m)東西 32 間(57.6m)面積 8,290 平方m。一方の西の丸は南北 60 間(108m)東西 35 間(63m)面積 6,800 平方mで、実のところ薪丸のほうが相当に広いのである。なぜ西の丸より小さく描かれたのか、それは不明である。

慶長期富山城の正門(大手)は西側にあった。したがって薪丸は本丸の背後に存在する出丸という位置づけになり、本丸東側を守る重要な郭であったことがわかる。薪丸と西の丸の違いは、単に位置の違いの問題にとどまらない。本丸を中心に西の丸の手前(西側)には三の丸が存在するが、薪丸の手前(東側)には三の丸がないという大きな違いがある。それゆえ敵が攻め込んできた場合には、西の丸側は三の丸を介して二重の防備となるのに対し、薪丸側は直接攻撃にさらされることになる。この意味で薪丸は本丸を防備するための重要な位置にあり、西の丸よりも大きな郭となるのは納得できる。

薪丸の名付け親は前田利長である。利長は慶長 10 年、金沢の家督を嗣子利常に譲って富山へ隠居し、富山城の築城に着手した。このとき利長は本丸背後を守る重要な郭に薪丸の名をつけた。

薪丸という名前の郭は、それまで利長がいた金沢城にも存在する。位置は本丸の西側、三十間長屋のある本丸附段西側の一段低い郭で、西下方にいもり堀、南下方に玉泉院丸を望む位置にある。

この郭は、利長が金沢在中の慶長 6 年、利常の正室として、将軍徳川秀忠と近江小谷城主浅井長政の娘小督との間にできた次女珠姫(1599-1622)を迎え入れた際に築かれたもので、薪木を入れるための蔵を建てたことにちなんだ郭名とされている⁽³⁾。

しかし珠姫の輿入れは、幕府への叛意のないことを証明するため利長が母まつ(芳春院)を人質として幕府へ送った見返りであり、利長にとっては悲哀に満ちた前田・徳川の融和措置であったであろう。利長にとって珠姫の輿入れにちなんだ薪丸の名はまた、母まつとの別離をも意味する名前であったのである。

富山に隠居した利長は、築城後重要な東側の出丸にその薪丸の名を付けた。東国の江戸にいる母まつの面影を富山城の縄張りに投影し、想いを忘れないという意味だったのかもしれない。

注 (1)加藤達行「富山城東ノ丸について」『富山市の遺跡物語』No.4 2004

(2)古川知明「近世富山城の縄張りについて」富山史壇第149号 2006

(3)森栄松『金沢城』北国出版社 1970